春のものの音

水野仙子

○

部屋の入口の快活な間もなくされても、それが決して不自然な間違つた事のやうでなくなり、すう〳〵する寒い風も吹き込まなくなつた。その入口の廊下を越えて、鐵の格子こ動かぬ蝶この外に、陸河堂の陽前な横通りがある。

リーン！　こ軽く疾驅してゆくエム輪の音、時にはブー〳〵こ駅な自働車の地響も傳はるけれど、其後から、鶴氣相にタラン〳〵こ叩いて行く蕎入れ屋の鐘の音で黙められる。

「ザツクサツクサツク、サツクサツク、ザツクサツク」

「ザツクサツク、ザツクサツク、ザツクサツク！」

その揃つた調子がだん〳〵近づいて來ること、少しはついて「ザツクサツク、ザツクサツク！」

中學生の一隊が隊足で通るのである。

それから暫く間を置いて、何こもいへず軽やかな日和下駄の音が、遣のい、高臺の上に響き渡る。

「すつかり春の足音だね。」

枕許に散つてゐる菓子の包紙をひねつて屑籠に入れたり、暖んだ牛乳の空壜を廊下に出したりしてゐた道三が、すつかりそんな健念に捕はれてゐるものこ思つてたのに、意外にも突然さういふ。

「つまらない！」

で、私は思はず呟く。手の今、檜れ〳〵こその春らしいもの音に聞き入つてゐた矯イ！

「何故？」

「自分一人で浮かれてゐるんだものミ」

しかし、問ふかも含べる方も薄く笑つてゐたのであつて、言葉こ共に笑ひも音に出、如何にもその春の嬉すものに對する親みを、可笑しな理に合はないここのやうにする。

で私は、健康な人が當然に持ち得る權利を咎めたやうなやましさを覺えながら、その心持に知らん振りをして、手をあけてつく〳〵こ自分の腕を眺め廻す。あんなに醜く眼れ上つた手が、今はすつかり細かな皺を たんで、普通以上に小さくなつてゐる。痩せて安心の出來る病氣はこの胃潰瘍だけれこ、しかし痩せ過きではやつぱり心細くもある。

かうして私の内臓が儀手に眠れたり痩せたりしてゐる間に春は來てしまつた。顔を撫で、見る。ごうやら近頃はわが顔のやうな気がする。春を病むには醜く腫れてゐるよりも痩れてゐる方がぜめてふさはしいかも知れない。それでは、「いつまでちつしやい！」こ勧めに出掛けようこしてゐる道三を目で送る。

模が閉る。その横紙に鉛筆に坐つてゐる「おかめ」さん達こ、私は退屈な、そして気分のわるい午後を無言で過さなければならない。ふこ、

「春を下宿の一間に病む。」といふ言葉が額のあたりに浮んで來る。繪いてその情景が他事でもあるやうに私の目に映つて來る。壁には褪のすり切れた外套が、首吊りのやうにだらりこ懸つてゐる、その陰に下つてゐる手拭ひも、かうして見れば可なり黒くなつたものである。本棚の上の方に寫居した士鱗や、じなびた林檎、寒でゐても手の届くやうなこころに置かれたシトロンの壜や牛乳、机の下には炭箱が潜んで居、机の上にはタカヂアスターゼ鑑の空になつたのが幾かつてゐる。病室であり、書齋であり、答間であり、その他すべてを象ぬるこころの下宿の一間よ！

○

窓の外には、白い椿こ赤い椿こが映いてゐる、いつからかそれを言葉には聞いてゐたけれこ、きのふ初めて眼千にしつ寄つて、私はそれを見た。赤いのは美しいやもめのやうに、靜かに振しく笑つてゐる。崖の下に根を張つたその二本の椿は、賀かな春日を受けて、崖の上の部屋を覗いてゐる。根の若芽も強ひて開かされた喫見の手の様に、弱弱しく枝に着いてゐる。その茂みから、小鳥の行方を追つて、ふこ眼を遠に、そらすこ、三椅町透りこ賑しい大きな建物の屋上庭園に、軟綿が音もなく揺してゐる。家こ家この間の往來にチラリこ見える電車も、音もなくこつて行く。何こいふ靜さだらう！

チラリこ眩光に動く物があるのでまた其方に心を向けるこ、佛英和女學校の赤煉瓦の窓から、白い物を冠つた尼さんが、矢張り音もなく動いてゐる。物音は總て一つになつて天に昇つてしまつたのだらう。動くものは唯だ黙々こ動き、何からこも分らない物音が、唯だ何處からこもなく靈いで來る。九段あたりの高臺の空をさもこ流れて行く煙突の煙、それを追つても行くこ、遠に浮き出した やうに富士の姿がある。

バンバーン！ふこ眼の下から獨立して佇れた木の響きが起る。女湯の流しを知らせる拍子木の音である。然しこの靜かに平和さうな春を蹂所にして、私の氣分は段々悪くなつて來る。病的に眩いやうな鬱かな頭、けつたるく痛い雨腕、胃のあたりから押し出されて來る生あくびそしてこうにも仕様のない醜の氣持惡さ。あ！

取り替へる替へ病氣をしてゐる三年越しの弱い体にも呆れるれこ、その打撃に堪へられ、又飽かず堪へようこしてゐる心のみちめさいつ來て見ても元気だこ人は云ふけれこも、時には母親のかへりを待ち切れぬ子供のやうに、心細く淑しくひこりめそ〳〵こ泣いてゐるここもあるのである。

○

私達病人に取つて、お醫者様はまここに全能の者であるべき筈である。それ故、ヒツの寫真の廣告をみて、そこに書いてある腎臓炎の症狀なるものが、すつかり私のやつてゐるここ、符合しても、その廣告に從つて、ヒツ人參膏を買つて用ゐるこいふ

醜惡さを排して、わざ〳〵その道で有名な博士の診察を受けに行く。さうしてすべての苦痛を訴へる事によつて、直にもそれらの惱みが癒やされるかのやうな期待を抱く。こころが、私か全身全靈をあけて惱んだこころの、その名狀すべからざる適當な言葉のない個性ある痛みや氣持惡さやが、既往症を取る置きの手によつて、主訴の部に、食思不振、心頭痛、嘔吐、なこ、いふ、抽象され、概括された文字こなつて現はされる。

博士は、その素人から聴取した、屢りくこいけれこも貧慮的な言葉を、都別的な專門語に書き改められた既往症を手に取つて、既に頭の中に半分患者を診でじまひ、それから手を下して様々な機械を用ゐて肉體を診察する。そして診察を下す。廉が書き取られる。それから患者に向つて食物を制限し、安靜にすべき事を命令する。そこには最早や一つの有りふれた病氣より外に、私の病んでゐる病氣はない。

私は安心したやうな、又かつがりしたやうな、奥変した、その辯孤につまれたやうな気持ちで歸つて來る。やがて自分一人になつて床の上に横はつて見ること、病苦はやつぱり私一人のものになつて私を責苛む。病氣は有り餐れてゐても、私にこつてのその影響は決して有り餘れてゐない。確かに彼は獨立したものである。

毎日、しよう事のない、默々な日が續く。でそろ〳〵又お醫者様が頻りになり出して出掛けゆく。今度こそは あそこもかう、ここもかうこ訴へて それが何故であるかを説明して貰ひ且つ又その苦痛を緩和して貰はうこいふ、押べる事の出來ない期待を抱いて診察の順番を待つ。ここころで一歩診察室に入つたが最後、私の病氣は極一般的なもので、さうであるが以上さうした苦痛は至極當り前なものであり、それは何等の特別な意味も持つてないここ、從つて言つたつても甲斐のないここ、言ひかへれば慢性にまで口外するの値打ちがないここを私は知るのである。

醫學に對する信頼こ天望こが、私の生活をジヤンボンに鹽づけ來る。こいつて、神にのみ切を負はするには餘りに信仰の薄き者であるによつて、苦痛の重荷は、それが自然に軽くなる時まで、私の肉体に重いのである。たゞ私は本能的に、苦痛はたゞ堪へる事より外に、それを軽くする方法がないのを僅かに知つてゐる。

○

美しく軽やかに性つた從姉妹が二人、穴のやうな下宿の二間に匂ひこ色こを添した。三越の歸りなのださうである。黄な水仙こほのもい小梅さくらこを一人が、一人は孤行船の形ちをしたゴム風船を持つて、すちりこ賑かに入つて來たのを、私は春に目をみはつたやうに見上げた。櫻を浮織にじた、あつさりした薩色のお揃ひの半襟、あれがこの春の流行なのであらうこ、やがて消えて行く足音を追ながら私はひこりで愚つた。